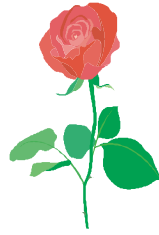


風前の薔薇



一三五月に一度、思い出したように東京のTさんから夫に近況報告の電話がある。損害保険の業界誌の記者のTさんとは二十年来のお付き合いで、かつては私も夫と一緒に月一回は彼のグループと夜の集いを楽しんだものだ。鹿児島に移った際には、古本ながらバールザック全集二十巻をプレゼントして下さって先日私も私が依頼した佐々木邦の撰集を送って下さっている。

二十年以上も前のことだ。Tさんの企画による夫と彼の業界誌上の対談の相手の方々がその一度限りの対談での別れを惜しんで、彼を幹事にキザ会という会を作った。メンバーはW大学のT教授を会長に、広告会社社長や大手電機会社や損保会社の優秀な課長さんなど、キザで決めるという面白い集いだ。初めは銀座の飲屋に月一回集まっては、経済やら文学やら時事の話題に花を咲かせたものだった。その店が潰れてからは、会員の行きつけの店や、おいしいものを食べさ

せる店の探訪となって、鰻の好きな夫のために東京の有名な鰻屋は殆ど行っただと思う。天麩羅、河豚、豆腐中華、鮮魚など、これはという店は標的になった。極めつけは鱈で、鱈尽くしの料理に恐る恐る箸を運んだこともあった。年に二回は一泊の遠出をして、鎌倉那須軽井沢にも行き、その折々のウイットに富んだ会話も思い出である。

私がK大学商学部の新進の教授だったM先生に初めてお会いしたのは、新橋の「井筒」というちゃんこ鍋屋さんで、原則として夫婦参加ということと奥さんもキザ会のメンバーになられた。特に私たち夫婦は、教授の行きつけの麻布十番の河豚料理のお店や、熱海のご自宅に招待して頂いたり、楽しい時間を多く過ごして来た。

東北にある国立の大学学長のお嬢さんだった奥さんは、美術大学を卒業された後、アメリカ力の大学で版画を教えていらしたが、K大学から留学されていたM教授と運命的な出会いをされて、アメリカで結婚された。三才ほど年上の奥さんは、お仕事をきっぱり罷め、研究に専念される教授に本当に献身的に協力なさってい

た。さつぱりして大らかな、気性で知性溢れていらつしやる。お様が無く、ゆつたりとしたその生活ぶり、教育費のかかる年頃となつた子供たちのための会社勤めに、よれよれといった感じの私には羨ましく思えた。

大学通勤のために買われた西新宿のワンルームマンションでは、お手製のほつれん草のキツシユとステーキを御馳走になつた。ポラロイドで撮つて下さつたその夜のスナツプは何処に仕舞つただろうか。熱海では新鮮なお寿司を御馳走になつて、ヒラメのエンガワが美味しいのだと説明されたが、あれから二度と口にしたことはない。麻布の「小柳」では河豚のお鍋のあと白子を入れたおじゃにして下さつて、そのプチプチした感触も美味しさも忘れられない。何かの折に頂いた藍染のコースターは今も大切に仕舞つてある。

美術専門の奥さんのこと、インテリアのセンスは格別で、洒落た壁掛けも単なる風呂敷と聞いてびつくりしたこともあつた。派手ではないお洋服にも本物の感覚があつた。私はまた自由に外人と話される語学力が羨ましかつた。

先生は、「兄弟はなく、高齢の、両親の面倒を見るため、郷里の伊勢に移られたのは二年前である。」「鹿児島に是非行きたいと思つていたが、父が病気で」と電話で残念がつて居られたのは、昨年正月であつた。暮にはお父上の喪のお便りがあつた。

夫とTさんが電話で話をしている。どうやらM教授が話題のようだ。

「えつ。なんだつて、奥さんが！あと四カ月？」

絶句した夫は電話を切ると、名簿を片手に伊勢の番号をツツシユした。先生との話の様子ではやはり思わしくないらしい。夫は受話器を私に渡した。

「去年の秋に肝臓癌とわかつたんですが、父にかまけて手遅れになつてしまつて。K大の病院で手術をして今戻っています。春になったら是非鹿児島に連れて行きたいと思つてそつ話しているんですよ。」

懐かしい教授の声だ。ああ、是非いらつしやつて！あれほど楽しみにしていらつしやつた鹿児島ですよ！神様、その位のお時間を下さつてもいいでしょう！

ずんと沈んで行く心の中で私は絶叫する。崩れそつな白薔薇が脳裏に揺れている。